

私の教育観・学習観そして今

Ma vision de l'enseignement et de l'apprentissage, et maintenant

伊 川 徹

IKAWA Toru

Université d'Ashiya

ikawa@ashiya-u.ac.jp

画家を目指して、美大入試対策のデッサンに励んでいた高校3年生の1月に（たとえば、1643年1月15日の20歳の誕生日を目前にした6日に、Molièreが国王の室内装飾家の将来を捨て、女優 Madeleine と駆け落ちし、役者への道を辿ったのだが）、自ら非才を知って、恩師に誉められ？木炭を折った。失意の浪々中に、次は小説家だ！と仏文科中退への理想を思い描いた。が、不幸なことに？単位を総て優秀な成績で取得し、卒業してシマッタ！

教育者にとって、何をどこまで教えるのか？は永遠のテーマだが、昭和47(1972)年に教壇に立って以来、欠かさず思い続けていることがある。それは「恩師の真似をしない」ことである。後年、田島 宏先生から同様のご教示を賜り、この考え方にお墨付きを得たと感じたものだ。正直なところ、真似をしようにも、半世紀前の学部にも大学院にも「フランス語教授法」の講座など存在せず、学部生の頃、「英語科教育法」を履修し、英語の教育実習に出かけ、何と中学校・高等学校教諭普通免許状（フランス語）を取得したのだから驚きだ。長らくその免許状を行使することはなかったが、関西の有名8大学での16年間の非常勤講師歴を（手前勝手に Molière 一座の13年間に及ぶ旅回りに重ね合わせたのだが）評価され、附属高校にも出講することを条件に（されたが、25年間に2度、1年間と2年間出講したのみであった）現在の勤務先への就職を果たした。

学部生以来20年間に及ぶ家庭教師就任中に独自開発した生徒指導術（理解力が劣り、学習意欲のない少年を *étudiant motivé* に変え、成績を上げ、希望進学校に入学させること）、学部から大学院時代へかけての素人劇団活動の成果（常に観客に背を向けず、腹式呼吸の発声ができ、「間」を意識した標準語が話せること）、更には多少の画才（黒板に一瞬にして苦もなく絵が描けること）を含め、「教えること」に関して何一つ無駄のない人生であった。たとえば、既に引退したかのような自己紹介だが、定年退職後、厚顔にも1週2日間、未だ教鞭を執っている。かくして、教壇に立って42年目、家庭教師時代を含めると教歴は50年目を迎えている。

Rencontres Pédagogiques du Kansai 2014

長い教歴を経て言えることは、教授法の原点として、言語は「文化」であり、その言語を話す「国民」の「思想」そのものだという認識を持ち、言語学習の究極の目的は相手を理解し、許容するためであり、間違っても、言語を *l'outil communicatif* などと捉えて、文化的背景を欠いた言語教育を推進してはならないということだ。

*

初対面の挨拶をするときに、殆どの英米人が *Nice to meet you. My name is John Francis.* と名乗るのは、平素 *May I have your name?* と尋ねられることが多く、これに対応して発話しようとするからであり、*I'm John Francis.* では初対面の相手に自己主張が強いと思われ、*I call myself John Francis.* では相手に持って回った感じを与えると考えからであろう。また、イタリア人の殆どは *Piacere. Sono Gianfranco.* と言うが、当該主語代名詞 *Io* が通常省略されるので、初対面の相手に対して、自己主張が強い印象を与えないで済むからであろう。*Mi chiamo Gianfranco.* と名乗る人がいるのは、平素の名前の尋ね方が *Come si chiama, Lei?* であり、これに対応し、相手に控え目な印象を与えると考えるからであろう。勿論、フランス人の殆どが *Enchanté. Je m'appelle Jean-François.* と名乗るのは、イタリア人同様、名前を *Vous vous appelez comment?* と尋ねられることが多く、これに対応し、相手に謙譲の態度を伝えようとするからであろう。初対面の相手には、自己主張が強い印象を与え兼ねないので、*Je suis Jean-François.* と言う人は珍しく、況してや客観的且つ他人事のような印象を与え兼ねないので、*Mon nom est Jean-François.* とは言わない。言葉は生き物であるから、時代の変遷に連れて流行り廃りがあるとは言え、地理的に近接し、同じ表現や語法を持つ英・伊・仏の三国の間でさえ、修辭法がかくも明確に違うのである。

それでは、相手がフランス人であれば、誰彼構わず *Enchanté(e). Je m'appelle ~* と名乗って良いかと言え、フランスのみならず、ヨーロッパ社会には *la hiérarchie sociale* がほぼ完全に残っており、相手が当方に関心がない限り、誰も話しかけもしなければ、誰も紹介すらしてくれないし、また誰かに紹介を求めてもマナー違反ということになる。そこでは、我々日本人は、世界的常識から言えば、極めて特異な社会環境に暮らしていることを想起しなければならない。したがって、どうしても相手と懇意になる必要があれば、まず、*Excusez-moi de me présenter, ...* と切り出し、*Je m'appelle ~* と自己紹介する以外に方法はない。しかし、例え名刺を手交したところで、相手が当方を魅力的に感じなければ、同国人でさえ名前を覚えるのが苦手なフランス人が次回 *Bonjour, ~!* と名前と呼んでくれるかどうかは保証の限りではない。我々が相手の名前を忘れたときによく使う手である *Bonjour, madame / monsieur. Ça va?* で誤魔化されてしまうかも知れないのだ。

初修教科書の冒頭に何らかのかたちで、*Enchanté(e), mademoiselle / monsieur.* と表示され、単純に発音や綴り方の練習として用いられることが多い訳だが、同時に上述のような文化的背景にも触れておけば、学生諸君がこの表現を記憶する意味が生

Rencontres Pédagogiques du Kansai 2014

じるのである。そんな余談で統一教科書の進行が遅れ、期末試験範囲に辿り着けず、学生諸君に抗議されたらどうしてくれるのだ！とお叱りを受けそうだが、フランス語受難の昨今であるにも関わらず、否受難のときだからこそ、学生諸君に支持されるような内容のある授業を推進しようとの意気込みが各校に在り、専任教員が非常勤講師陣に各自が最良だと考える教科書の独自選定を依頼したり、全非常勤講師と共に知恵を出し合って、使い易い統一教科書を制作したりという *solidarité* の機運が到来した模様である。

*

Internet と携帯電話を通じて外界と接触し、出来れば心地良いカプセル（自室）に籠ったまま一生を終えたいと真顔で考えている昨今の学生諸君には、春夏の長い休暇中にフランスに出かけるなどという発想は皆無だそうだが、確かに Google Earth を駆使すれば、Paris 市内を仮想散歩できるので、時間と金銭を費やし、事故や盗難に遭うような危ない思いまでして、往復の24時間に耐える意味はないと考えるのも解からぬではない。しかし、それでは Call 方式の学習から一歩も出ないのではないか？生身の人間に接して、感情豊かに意志の疎通を図れてこそ言語学習の成果である筈だ。

それでも、苦勞して学んだ旅行用会話の成果を試すべく、入国審査官（何故か Français(e) d'origine africaine が多い！）に初めてのフランス語で Bonjour, Monsieur! と挨拶して、怖い顔で無視され、入国スタンプを押したパスポートを手交されたとき、めげずに Merci, au revoir! と返すと再度無視され、意気消沈した体験を持つ人びとは少なくなかろう。入国審査を生業とするフランス人は、来る日も来る日も1日に何千人もの旅行者を相手にし、疲れ果てているのだ。そうでなくとも、17世紀に我が身の存在さえ疑い、*DISCOURS DE LA MÉTHODE—pour bien conduire sa raison, et chercher la vérité dans les sciences* (1637)を著して、Cogito, ergo sum.の命題に辿り着いた René DESCARTES 以来、常に見知らぬ人間を警戒し、敢えて無視するのはフランス人の習性であり、一般商店なら相手は顧客だが、空港の旅行者（のみならず、役所や郵便局への来訪者、百貨店やスーパー・マーケットへの来客）などは一過性の存在とて、二度と会う筈もなく、親切に対応する必要のない相手への当然の態度なのである。教科書にこういうときにはこう言うを書いてあっても、全く通用しない場合があることを現地で思い知るのだ。初修者に Bonjour. Ça va?—Oui, ça va. Et toi?の練習をさせるとき、同じ対話でもコンテクストによって相手の反応や返答が常に違うことやフランス人は意味なく笑顔を作らないことを教示しておかねばならない。

一方、用を足しに（駅へは行かず、caféで Où sont les toilettes? と、婉曲には J'aimerais / Je voudrais me laver les mains. と尋ねることを是非教示しておこう！）入った見知らぬ Brasserie, Café, Restaurant（と表示してあり、どれが本当か分からぬことが多

Rencontres Pédagogiques du Kansai 2014

い!) では serveur / serveuse と予想外に話が弾むのだ。この場合、当方は間違いなく来客であり、相手も接客を生業としているからである。そこへ2度3度通って、店の誰かと知り合いになれば、どれほど居心地が良くなることか! つまり、フランス人は見知らぬ者には不親切だが、一旦知り合いになれば、我々の感覚ではサービス過剰ではないかと思うほどの親切振りを発揮する。当方が恒常的に訪れるようになれば、その時刻にいつもの席へ案内してくれるし、酒飲みだと判れば、une carafe / un pichet de vin も当日用意されている中で当方好みのものが注がれ、du bifteck も尋ねもされずに、好みの焼き加減 saignant / à point / bien cuit で運ばれて来る。食後には、Un café, Monsieur / Madame? と向こうから尋ねられ、思いもかけず、Voilà! C'est pour offrir. の一言と共に une tarte aux poires が一緒に出て来ることもある。もっと親しくなると、いつの間にか tutoiement に変わっており、Tu connais Madame Champi? C'est une ancienne actrice japonaise. Tu sais, hier soir, elle est venue et, tu sais, elle m'a dit: «J'aimerais me laver les mains, Monsieur.», figure-toi? C'est une dame d'un certain âge, tu sais, parce que j'ai vu qu'elle se maquillait consciencieusement, mais, tu sais, c'est une dame BCBG et soigneuse de sa personne, ouais. と機密情報も漏らしてくれるのだ。

親しくなった相手が近所の boulanger や pâtissier なら、毎朝順番抜かしで対応してくれたり、C'est pour offrir. と形が歪な une brioche や1個だけ売れ残った un gâteau au chocolat をプレゼントしてくれたりもする。

例外的に、親しくなくとも、早朝や夕刻に駅や街路で体調を崩した人が蹲れば、たちまち10名前後の人びとが駆け寄り、Ça va, Madame / Monsieur? と尋ね、或る者は肩を貸して当人を立ち上がらせようとし、或る者は携帯電話で une ambulance を呼び、また或る者は当人の持ち物を拾い集めて手渡し・・・と実に甲斐甲斐しく世話をし、援助を惜しまない。恐らく援助者は会社・役所・工場などの勤務や学校の授業に遅刻するであろうが、ビジネス大国に暮らす英米人・ドイツ人・日本人・北欧人は(白夜があるので、とりわけ) mono-chronique の(機械式時計のみを頼りに生活する)人びとであるのに対して、ラテン系のイタリア人・スペイン人・フランス人は生来 poli-chronique の(日時計を主とし、機械式時計を併用して生活する)人びとであり、彼らの腕時計は大抵お飾りに過ぎず、クォーツ時計の長針が十人十色の時刻を指し示しているのが常である。したがって、職場・学校・会議・パーティーへの遅刻は(むしろ礼儀作法であり)さほど厳しく非難される行為ではなく、各々の目的地に遅参したとき、Désolé(e), mais j'ai sauvé une dame / un monsieur qui tombait malade à la gare / dans la rue. と告げれば、誉められこそすれ、咎められることはない。いずれにせよ、キリスト教国では困っている人を見捨てたり、見て見ぬ振りをしたりすることは神の意思に反する行為であり、誰もこれを看過しないのだ。

フランスでは、我々外国人であっても、近くの駅がどこにあるかを尋ねるといった些細なことから、急な体調の変化に因る苦痛に至るまで、Je suis très désolé(e) de vous déranger, Monsieur / Madame, mais j'ai un problème. と呼びかければ、必ず助けてもらえることを覚えておこう。しかし、この一点で我々は彼らに相当劣っていることを

Rencontres Pédagogiques du Kansai 2014

反省しなければならない。何故ならば、2～3名の人びとが救助に当たっていれば、自分は先を急ぐし、手伝わなくても良いか・・・と、恐らく大多数の同胞が現場を素通りしようとするからである。時間だ！時間だ！と幼少期から追い立てられ、旧軍事教練の名残なのか、家庭でも学校でも、遅刻と答案記入の時間切れを重犯罪の如く非難されて育った国民の不幸なのかも知れない。

*

失業率の低下とそのためのワーキング・シェアを企図して、週間法定労働時間が35時間、1日平均7時間労働のフランスでは、サラリーマンの昼食時間が我が国並みに1時間前後となり、ファスト・フード店が人気ようだ。これまでは、Parisのcaféはフランス文化そのものだと認識していたが、そのここかしこにSeattle生まれのStarbucks Coffeeが開店し始め、しかもMcDonald's同様、入店客の殆どがフランス人なのを知って、些か驚きを禁じ得ない。昼食時に友人とcaféに入れば最後、une carafe / un pichet de vinを飲みながら、ゆっくりと食事を終えて、世話をしてくれたserveur / serveuseに勘定を頼み、Ouais! J'arrive!の声を聞けど、一向にやって来ず、やっと支払いを終え、僅かながらpourboire(酒手だから我が国と同じ発想!)を置いて店を出るまで、たっぷり2時間を要するという悠長な食事を続けているのは、最早近隣の商店主か観光客だけになってしまったのかも知れない。

このようにフランス文化も日々変遷を遂げ、紙媒体のみの情報では時流に乗り遅れてしまう。ParisのMétroの切符は今何色なのかを自ら或いは最近の旅行者に確かめたり、Internetを駆使して、最新情報をdownloadしたり、比較的海外取材番組が多いCS・BS放送を録画保存して援用し、フランスの映像(本物)を観たり、可能なら、ときどきは知り合いのフランス人をゲストに招いて、平素の授業をla classe à 3 dimensionsへ転換するなどの工夫も必要であろう。弊学でも、昨年度はl'université de Franche-Comté (Besançon)の院生が大学院博士課程に在籍していたので、毎週1年生と2年生双方のフランス語クラスでのenseignant assistantを依頼、年間を通じて、毎回la classe à 3Dを実現できた。この院生は空手道の研究者で、日本文化への造詣が深く、まさしく日仏双方向の文化探求に寄与してくれたことは誠に有難かった。例えば、教科書にcontractionの例: de la glace à les fraises > de la glace aux fraisesが掲載されていたのを目ざとく見つけ、「これはアイスクリームにゴロゴロと苺が入っているのか?バラ色で苺味のアイスクリームならde la glace à la fraiseだ」と誤りを指摘してくれたかと思えば、complément d'objet directを用いて文章を書き換える問題: J'ai vu ma cousine ici hier soir. > Je l'ai vue ici hier soir.で、CODとparticipe passéの性数一致が行われることを忘れて、それを教員に指摘され、学生諸君に「フランス人がフランス語間違うたらあかんで!」と揶揄されるなどまさしく双方向の文化が入り乱れる楽しい授業が展開された。

さて、これでも文化的背景を欠いた言語教育の推進など可能なのであろうか?